

竹間沢に人形芝居が伝わったのは、約130年前。竹間沢の前田左吉さんのもとに、人形芝居座元の六代目「薩摩若太夫」の長女・ていさんが嫁いできたことがきっかけになりました。

## 竹間沢車人形の全盛と衰退

人形芝居の伝習を受けた前田家。左近さんを座元として「吉田三芳座」を組織し、ていさんが三味線をひき説経節を語り、近隣の村々や遠くは千葉県・神奈川県など各地を興行。明治19年に息子の信忠さん（芸名：民部）が二代目座元になると、興行は盛んになっていきました。

しかし大正時代になると、浪花節や新派劇さらには映画も大衆化し、興行数は減り、やがて人々の記憶にも遠いものとなってしまったのです。

## 車人形の灯、再び

昭和46年に県の調査で前田家の納戸の隅に置かれた箱から、車人形の芝居用具がほとんど欠損することなく発見されました。大正10年に最後の興行が行われてから、およそ50年。車人

形を演じたことのある前田信次さんと近さん（民部さんの長男と次男）が存命で、昨日のことのように車人形が盛んであった頃のことを語り、翌年、竹間沢車人形は注目を集め「何とか再演できないものか」という声が高まってきました。

## 魂を継ぐ者

現在、竹間沢車人形保存会は14人。コピスみよしで毎年公演を行うほか、町内の小中学校に出向き演技を披露。さらにチェロとコラボするなど斬新な取り組みも行う一方、コピスみよしでの公演に出演できる人形遣いを募集し、稽古を行うなど、後継者育成にも努めています。

日本に3地域だけ残る車人形の一つが三芳町にあることは、誇りに思えるものです。12月3日にコピスみよしで公演を行いますので、ぜひご覧ください（P11に詳細）。



1 2013年に、東京フィルハーモニー交響楽団の首席チェロ奏者の渡邊辰紀氏と車人形が異色の共演。「斬新な試みで面白かった」と話す末吉豊隆さん（写真左）。人形遣いとして約25年の経験を持ち、里神楽でも活躍している。2 車人形の頭も里神楽の面と同様に手作り。前田家は代々手先が器用だという。3 竹間沢の集会所で行われている稽古の様子。演技指導をする舞台監督も思わず熱が入る。



1 池上喜雄さん演じる小栗判官の父。機敏な動きができるのは車人形だから。2 入場券となる木札や演目の台本。歴史民俗資料館に展示中。3 図書館での公演。手の届く距離で迫力の演技。



4 代目家元の前田益夫さんが演じる人形。悲しみの表情を作るのに言葉は必要ない。



（写真上下）人形を3人で操る従来のものを発展させた車人形。一人ひとりが演じる人形の表情は、まるで生きているかのようだ。本番では黒子に身を包むので、演者の表情は見えない。



↑復活公演で人形を操る前田近さん。

## 昭和47年復活公演

大正10年に最後の興行が行われてから50年後の昭和47年6月18日。半世紀ぶりに行われた復活公演当日は「甦った郷土芸能」と報道され、町立中央公民館（当時）は200人を超える観客で満員に。あっという間の2時間だったと、当時の『広報みよし』は振り返っています。

## 守り続けた伝統芸能

三芳中学校の授業で竹間沢車人形保存会の車人形公演を目の当たりにし、「こんな伝統芸能が三芳町にあるんだ。自分もやってみたい」という思いが生まれました。そんなときに、12月3日の公演に人形遣いとして参加できる機会があると知り、応募し公演に向けて稽古中です。実際にやってみると、ロクロ車に乗りながらの操作は思った以上に難しいですが、楽しいです。地元の伝統芸能を守り続けるため、これからもずっと車人形に携わっていきたいです。

竹間沢車人形保存会 人形遣い参加者  
三芳中学校1年 谷澤啓祐さん（12）



川根町立三芳中学校  
楽しみなながら  
守り続けた。

日本に三芳町を含め3地域のみ現存する貴重な伝統芸能「車人形」

よみがえ  
**甦った、車人形。**

CHIKUMAZAWA KURUMANINGYO

竹間沢車人形保存会



## 車人形とは

車人形を受け継ぎ、現存するのは全国で、埼玉県三芳町「竹間沢車人形」、東京都八王子「八王子車人形」、東京都奥多摩町川野「川野車人形」の3つのみ。人形遣いがロクロ車に腰をかけ、人形を一人で操る姿から車人形と呼ばれています。少人数でも公演を行うことが可能になり、演出の幅が広く、テンポの速いものや激しい動きができることが特徴です。

